

「月曜日」

2010/07/26

皿とスプーン並べといてくださいって言っても返事すらしない。

それどころかそういえば、顔洗えって言ったのに洗面所から音がしなかったから、まだ布団の中かもしれないなかった。起きろつつつたのに。

ちようどいい具合に鍋の中身がコトコト言い出したところで火を消した。

心の中でカウント開始。

手伝う人がいないので、仕方がないから自分で用意する。食器棚から皿とスプーン。皿にはほかほかのご飯をよそって、それからカレーも。僕の皿と太子の皿のカレーの乗せ方は違う。僕は半分にご飯、半分にカレーだけど太子は真ん中にお子さまランチのようなご飯のお城、周りをぐるり取り囲むようにカレー。めんどくさい注文だが、仕方がない。これがルールだ。

なぜか食器棚の引き出しから紙と楊枝でできた旗が見つかったので、タイミングの良さがうさんくさい、とか思いながらも突き立ててやる。あまり気にしちゃいけないんだ。たぶん。

サラダはどうせ用意しても食べないだろうから、野菜ジュースをコップに注ぐ。太子が緑のはイヤだとかねるから、冷蔵庫にあるのは赤いやつ。

一人でそこまで支度してから、お盆にのせて客間に行った。戸を開ける。両手はふさがっているの足で。加減ができてすばんと、結構な音を立てて勢い良く戸は開いた。

部屋の本真ん中にはこたつ布団がリストラされた、夏仕様のつくえがひとつ。

部屋の手前側には、まだ広げっぱなしの布団。まだくるまりっぱなしの太子。

「あつと失礼見えませんでした」

人間とは思えないような悲鳴を聞きながら、容赦なく太子の身体を越えていって僕はつくえに皿とコップを並べた。

「吐くかと思った。心臓とか」

「拾いませんよ」

「拾わなくていいよ」

もそもそと太子がカレーを食べている。もそもそと目をこすりながら。顔はまだ洗ってない。カレーがあるのにそれ以外のことはできないとのことだ。

それをさも当然のように言われるから腹が立ったが、朝の太子に腹を立てても仕方がないことはわかっている。

テンションが低いというのかなんというのか。ただ単に眠たいだけかもしれないけれども、昼間に比べておとなしい。話すことはいつも通りずれているものの、突然ボディアタックをかましてくるような、そんなアグレッシブさが欠片もなく、いつものようなツツコミをすると僕はたいそう空しい思いをすることになる。

「ああ、ほらまたこぼしてる。ほら」

「ん」

それから寝ぼけた太子はどこか幼い。ぐー握りのスプーンの持ち方とか、そのスプーンを持つ手が袖で隠れてしまっているところとか。

汚れたほつぺたをタオルでこしこしふいても若干迷惑そうに、それでもされるがままになっているところとか。

「ほら、ジュースもちゃんと飲んで」

「野菜嫌い」

「だから甘いジュースを買ってきたんですよ？ ほら」

「……………むー」

嫌そうに、それでもしぶしぶ両手でコップを持って一気に飲みきってしまったおとがんばるところとか。

「あつ、旗だ」

「最初からありましたよ」

「うん、あつた」

くるくると、旗を回して無性にうれしそうにしてるところとか。

僕は気にしないふうで、それでもしつかりと太子を観察しながら、自分のカレーを片づけた。

昨日で休日は終わってしまったので、当然ながら今日は仕事だ。

いつまでもだらだらしていられない。

「ほら、さつさと支度する！」

「ぎゃー!!」

ぐずぐずごねる太子をもっと見ていたい衝動をぐっと押さえつけて、風呂場に太子を連れ込んでシャワーで水を浴びせる。

一気に目が覚めたみたいでぎゃんぎゃんとずいぶん元気に暴れ回ってくれた。おかげで僕もそこそこ濡れた。

想定範囲内だったから気にしない。そもそもそのためのノースリジャージだ。着替えればいい。太子がびしょぬれなのも気にならない。どうせこいつ、洗面所使わせてもなぜか全身ずぶぬれになる。おまけに洗面所を水没させる。だったら風呂場がちょうどいい。

頭つからバスタオルをかぶせて、窒息させるくらいの勢いで頭から顔から身体から拭いていく。

本当は朝服でも着せてやりたいがどうしても嫌がるので、仕方なく青ジャージを着せる。途中でチャックが噛んだのだ死ぬだの何だの、騒ぐが僕も慣れたもので適当にあしらいながら着替えさせられるようになってきた。しかしなんだ、この、無駄スキルは。オカンか、僕は。

ぞつとしない想像に頭を振って、僕も着替えて太子の襟首つかんで家を出た。

「いやーだー。まだ寝るの!」

「寝言は寝てから言いましょね」

「だから、寝るの!」

「はいはい」

しかしいつの間にか気が付いたら太子と手をつないで歩いてた。どうしてだろう。

ゆらゆら手を振って、太子は少し不満げだ。

それでもまあ、一応は仕事に行ってくれるなら僕としては文句はない。

なんで手をつないでるのかちよつと謎はあるけれど。

「朝のカレーは、うまい」

突然太子が頑固おやじのような口調で何かを言ってきた。

「まあ、そうですね。一晩おいたカレーですからね」

「なんで一晩おくとうまいか知ってるか?」

「味がしみこむからでしょう。いったん、冷ましてから火を入れた方が、野菜とかに」

「ぶーポン」

「はい?」

「だから、ぶー、ポン。半分正解、でも半分間違い!」
「半分って……………」

「あのな妹子」

ちよつとこつち向かんかい、とても言いたげにぐいぐい手を引つ張られたので、太子の方を見た。

太子は得意げな半眼でにたりと笑ってくるから腹が立つ。

「昨日、楽しかっただろ？」

「はい？」

そして予期せぬ方向から直球が投げられた。思わずデッドボールでもしそう。ていうかする。

太子の得意げな顔は続く。

「はあ……………はい、まあちよつとは」

「だからだよ」

「……………もうちよつとわかる言葉でお願いします」

「鈍いなお前は」

ふん、と呆れたように太子が溜息をつく。

論すように、言い聞かせるように。

「お前と私と、ふたりでいて、昨日は楽しかったですよ？だから、その時に作ったカレーだったから、幸せがいっぱいでおいしいんだぞ」

びしつと。

僕の鼻先に指を突きつけて、太子は言い切った。

「……………言いたいことはそれだけですか」

「ふふん、ちよつといいこと言っただろー妹子感動にむせび泣いてくれてもいいんだぞ。ほら、今なら妹子特等席を用意してやる！ どーんと飛び込んでこい！」

「どーん」

「ぎゃー!!!」

太子が堂々と腕を広げるものだから、真つ直ぐに腕をのびしてぶつけてみた。

大げさなくらいぶつ飛んでいった太子が道ばたでぐったりしている。

僕といえは手を離すきつかけを得られて何となく安心してゐる。

ああ、今日も、空が青くていい天気だ。

「無視すんな！」

「ああ、なんだ太子いたんですか。……………チツ」

「舌打ち!？」

があん、と太子がまた大げさに、両頬に手を当てて硬直した。

と思つたら一目散に駆け出して、十分離れたところまでくる

りと振り返って何かを叫んだ。

次の休みまでまだ一週間ある。

「やーい、妹子のバカー！ おたんこなすー！！」
「……………んの、馬鹿」

そんな子供の捨て台詞みたいなので、言ってる悲しくならぬのだろうか。

逆に僕の方がなんでそんな低レベルな罵声を浴びせられなければならぬのかと、疲れた気持ちになってがつくりと肩を落とした。

それを何と勘違いしたのか、太子はますます調子に乗っていろいろ楽しそうに叫んでいる。

あんまりにも騒音公害になるようなら追いかけていつて黙らせようか。しかしそれも構ってやっっているようで少々癪だ。悩んでいる間に、太子が口元に手を当ててひととき大きな声で言う。

「また、休みの日に、遊びに行くからなー！！」

また。

来るのか。

ふーん、と呟いただけで僕は歩き出す。

あんまりゆつくりもしてられない。仕事は遅刻できない。

今日は太子に構っていたから、ちよつと時間が危ない。

考えるのも深読みするのも、後でいい。

太子は僕が歩き出したのを見て、慌てて逃げていった。それが一応仕事場の方向だったので僕は若干気を良くして、怒るようなことはしない。

ただのんびり歩いていった。

太子の後を追うように、次の休みを想像しながら。

「火曜日」

2010/07/27

仕事が終わって家に帰って、冷蔵庫なに残ってたかなーつてのぞき込んであった野菜適当に切って鍋に放り込んで。

「ああ、しまった……………！」

グツグツ煮込んだりしてふと気が付いてみたら。

「カレー作っちゃった……………」

いつの間にか鍋の中にはたつぷりと、カレーみたいなものがおいしそうに湯気を立てていた。

っていうか、カレーなんだけど。

どうして無意識的に作ってしまったのか。病気か。呪いか。ノイローゼか。

「……………どうしよう」

それよりもなによりも。

そのたつぷりの量にどうしたらいいか困ってしまった。
……………本当にもう、どうするの、これ。

「そうだったんですか。それは幸運でしたね」

「……………君にとって、つてこと？」

「え？」

調子丸君が律儀にスプーンを止めて、しばらく考え込み始めた。
と思つたらものすごい勢いで謝ってきた。

「すすすすいませんなんか言葉選びの調子がおかしくて！

災難でしたよね！ なんかもう妹子さんの手作りカレー作れてラッキー☆ みたいな下心がただ漏れにそうじゃなくなつてあのそのぎや」

「お、落ち着いて」

最後には、……………何だろ。滑舌とか平常心とかかな。ど

この調子が悪かったのかわからないけど舌嚙んだみたい。
動脈の調子でも悪いのかわりと出血してるし。大丈夫かな
この子。

「とりあえず、はいティツシュ」

「はひ……………ほうもすひません」

口にティツシュを詰め込んで、じつと黙り込んだ調子丸君
を見て、それから表に繋がれてるはずの黒駒を思い出した。

そもそも方向感覚の調子が悪かった。とかで黒駒とこんな
時間にこんなところまでできてしまった。とかで。

そういえばおとなしいなああの馬。結構な暴れん坊だった気
がしたけど。にんじんでも投げといた方がいいのかな。

そう思つて窓から顔出して、三角コーナーに放り込んでお
いたにんじんの欠片を投げた。

にんじんの欠片を蹴り飛ばす後ろ足だけが見えた。

うん、やっぱり、大人しくもなんともない。絶対調なじや
じや馬つぷりを見せつけられてなんだか満足した。

にんじんの飛んでいく先を見送っていたら、暗闇から聞き
覚えあるような悲鳴が聞こえた。

「キヤロット！！」

よくこの暗い中でわかったな。

思わずちよつと感心してしまったので、声をかけてやるこ

とにした。

「太子ー。こんな暗いところでなにしてんですかーつかまりま
すよ」

「私は捕まるような何をしてるんだよ！」

ふんぷん、とわざわざ口で言いながら、太子が窓に近づい
てきた。

それからすすすんと鼻をひくつかせる。

「カレー？」

「カレー」

「私、倭人。カレー、スキ！」

「なんで片言なんですか……………」

「……………ていうか入れて、助けて」

「はあ……………」

太子のにおいに引き寄せられたのか、玄関先にいたはずの
黒駒がこちらまできて太子に熱烈なアタックをかましていた。
黒駒、どうやら繫いでなかったらしい。野放しか。

仮にも聖徳太子の馬、それでいいのか、調子丸君。

思つて振り返ったら、今度は嚙んだ舌にしてみたのか調子丸
君がスプーンを持った姿勢で硬直していた。

何というか、おもしろい子だと思う。

大丈夫かな。あとで薬とか。いるかな、どうかな。

窓に振り返れば黒駒アタックによりノックダウン寸前の太子。

見比べて、無性に笑えてきて、とりあえず、まずは太子を助けるべく手を伸ばした。

「ほら、つかまって」

玄関に回るのは面倒だ。

引き上げて、抱えあげてくつはそのへんに放っておこう。

そう決めて、思った通り身長割には軽すぎる体を、窓から部屋の中に引きずり込んだ。

夜でも僕のまわりは落ち着きなく、疲れてしまうくらいにはいつでも楽しい。

おながが空くくらいに楽しいから、今日は、みんなでカレー曜日。

「水曜日」

2010/07/28

五時の鐘が夕焼け空に響いている。

遠くの方からかすかに聞こえてくるその音が、一体どこで鳴らされているのかを芭蕉は知らない。いつもは気にも留めないその音を、でも今日は心待ちにしていた。

いつもは、そういえば鳴っているな、程度の認識だった鐘の音が、こんなにも心躍るようなものだったなんて。

どこか寂しさやら侘びしさやらをともなつて響いていた童謡のメロディーが、いつも以上に明るく聞こえる。人間の気持ちなんて単純で簡単だ。

今までの認識をぐるりとひっくり返して、うきうきと芭蕉はデスクまわりを片づけた。なんといったって今日はこのときを、今か今かと心待ちにしていたのだ。

昼休み、たまたま休憩室ではち合わせた太子に話を聞いてから。

楽しみだなー、楽しみだなー、と小さく口ずさみながら芭

蕉はいつにない手早さで帰り支度を整える。若干の挙動不審を周囲の人間はきれいにスルーしていた。慣れている、とも言える。この程度の挙動不審は日常茶飯事であり、いちいち気にしていたら同じ職場で働けない。

だからさあて帰るぞ、とばかりに満面の笑みでイスを回して立ち上がろうとする芭蕉の襟首を掴む者がいたとしても、特に誰も驚いたりはしないのだった。

これも日常茶飯事、言ってみれば、恒例行事だ。

「げえっ」

「おや、どこから蛙のつぶれる音が」

むんずと芭蕉のワイシャツの後ろ襟を掴み、立ち上がろうとする倍以上の力で再びイスの上に引き戻したのは曾良だった。曾良は首が縮まって可哀想な悲鳴が聞こえても知らぬ顔、それどころかぐいぐいと、襟を引く力を緩めない。

「さあて、明日までの仕事が出てしまったので当然やってくれますよね。当たり前です、あなたの仕事なんですから。今決めましたけど、だって元はといえばあなたの書類不備からくる仕事ですからね。……………というか、まわりを見なさい、みんなまだ仕事だというのに一人定時上がりですか。良いご身分ですね。当然、この後の時間はあいてますね？」

「は、はなせー。私には、行くところがー!!」

「会議室ですか。良い心がけです」

「ちがう！」

首を絞められているというのに平然としゃべる、という高等技術を無駄に駆使しながら、哀れっぽい声を上げて芭蕉は曾良に引きずられていく。

まわりの人間は何となくそれを視線で見送って、それぞれの作業に戻った。
だつて早く帰りたいし。

書類の端を机の上でそろえる音が軽快に響いた。

「ふん、やればできるじゃないですか。いつもやってください」

「もういやドゥー……………」

フロアに他の姿はない。あとはみな、それぞれ自分の仕事を終えて帰っていった。

残っているのは書類をまとめる曾良と、デスクにぐったりと体を投げ出し、いじけた様子の芭蕉だけだ。

「みんなひどい……………つていうか曾良君、ひどい。私今日

行きたいところあったのに……………残業なんて聞いてない……………」

「いやでしたらきちんと定時の中で終わらせてください」

「だつていきなりだつたじゃん。いいじゃん、明日でも。明日できることは明日しようよ」

「会議は明日の午前ですけど？」

「わーつてるよう」

芭蕉は曾良とは逆の方に顔を向けて、曾良を見ようともしない。

見えないけれども、さつきからぐりぐり動いている指先での字でも書いているんだろぅなということは曾良にも簡単に予想できた。

予想を裏切らない男なのだ、芭蕉という人間は。

「曾良君のばーか。けちんぼー」

曾良はあからさまにため息を吐く。多少のいらだちを込めて。

するとびくりと芭蕉の方が震えたのがわかった。

ゆっくりと、振り向こうとして目が合いそうになる寸前でまた顔を伏せて、いじけたポーズを作る。

今度はいらだちではなく呆れで、思わずため息が出た。

芭蕉はこうやっていじけて見せるものの、本当は今日でなければならぬ仕事だとわかっているはずだった。

つまりただの甘えなのだ。いじけて見せて、それでもこちらが苛立てば様子を伺って。

分かりやすい男だ。

だからこそ、勝てない、と思つてしまふ。

曾良は苦笑して、懐から二枚券を取り出す。

これをこの場で取り出すことは、ある人物の思い通りに動いているようでいくらか腹立たしい。

が、そんな些細なプライドよりも、今日の前でいじけている人の方が優先順位は高い。

ただそれだけの理由と行動だ。

「カレー、食べに行きますか」

「……………え」

びくり、と肩が揺れた。

それでも堪えるように動きを止める。

ダメ押しのもりで、曾良は券の文面を読み上げる。

効果は抜群で、芭蕉はがばりと身を起こし、曾良の元に詰め寄った。

「え、嘘、なんで、ほんと？」

「はい、どうぞ」

一枚を、芭蕉の手のひらに乗せてやった。

それをまじまじと見つめる芭蕉の目がゆるゆると大きくな

って、それから弾けるように、笑顔に転じる。

「わあ……………わああ！ すごいこれどうしたの、私ちよう

ど今日食べに行きたかったところなんだけど！！」

「……………ちよつと、とある人にいただきまして」

「ひやっほーい！ 誰だかわからんけどやったー！ はっ、これが日頃の行いか。いやあ、いいことはするもんだな。さすが私！」

「大したことしてないじゃないですか。そんなこというならもうちよつと作業速度上げてください」

「なにおう！ 曾良君は何にもわかっていないんだこのマツ

スル松尾略してまつすおの活躍を！ 昨日なんて迷子の猫ちゃん拾ってあげたもんな！」

「……………まさかそれが遅刻の理由ですか？」

芭蕉が驚いた顔のまま口に手のひらを当てて黙り込んだ。

今時珍しいリアクションに、ほんのり頭痛を感じて曾良は

目頭をもんでため息を吐く。

「……………まあ、もう、いいですが」

「そ、曾良君曾良君、ほら早くいこう！ 支度して支度して」

書類はまとめてデスクの引き出しに。

必要な物のみ鞆に詰め込み、最後に電気を消して、曾良は

芭蕉とフロアを出た。

「木曜日」

2010/07/29

「行ってくるよ、行けばいいんだろ!!」

泣きそうな顔のまま。

差し出してもいないケンジの財布をひったくって、藤田は猛ダツシユで教室を飛び出していった。

「転ぶなよー」

転んでコロッケパンをつぶされては困る、と。

思って声をかけておいたが、聞こえていたか、どうか。

「あー……………」

「よし、じゃあ今日はコロッケパンな。ぜってー買ってこいよ」

「だから！ お前は俺の何なんだ！」

「何って……………親友？」

「親友をバシリに使うなよ!!」

泣きそうな勢いで言われても、困る。

コロッケパンは食べたいが、買いに行くのは面倒なのだ。

しかも昼の購買部なんて、まさに戦場のごとき有様。近付くやつの気が知れない。

じ、っと見つめても、若干怯むだけで動く気のなさそうな

藤田に、仕方なくケンジは言ってる。

二人の関係を決める、大事な一言を。

「ばらすぞ」

一人になって、頬杖ついてぼけっと窓の外を見ていたケンジは、雲が多いものの晴れてはいるので昼を屋上で食べることに決めた。

机の上に書き置きを残しておく。

片手をポケットにつっこみ、ケータイをいじりながらぶらぶらと、ケンジは屋上に向かった。

屋上は開放されている。ぐるりと巡る柵に取り囲まれて入

るものの、安全の為とわかつてるので学校に文句を言うつもりもない。

ケンジは柵に腕を引つ掛けて寄りかかった。

「あ……………」

ぼやいてみても、聞く人もいない。

一人きり空を見上げれば、晴れて薄水色の空にうつすらと、白っぽい小さな丸が浮かんでいた。

満月まで後いくつだろうと数えようとしたところで、吹きぬける突風に目を閉じる。

閉じた臉の裏側に、泣きそうな顔の藤田を思い浮かべた。

あいつは何にもわかつてない、と不意に強く思つて、こっそり風に紛れるように呟いてみる。

お前は何にもわかつてないよ。

そうしたら自分は今空腹なのではなくって、苛立っているだけなのだ簡単に気付くことができた。

腹の中が空っぽで、何にもないその空間で、ずっと叫び続けていような心地がする。

満たされることがなくて困る。

誰にも届かない思いを持って余して、困る。

その苛立ちの身勝手さに呆れて、ケンジは空を仰いだまま、あー、とまたぼやいてみる。

誰にも届くことない声を垂れ流して、目を開いて、ぬるい

日差しに表面の水分を蒸発させる。

痛みを伴つて視界はすぐに潤んだ。仕方なくぱちぱちと瞬きを繰り返す。

いつの間にか白い小さな円は、雲の間に隠れて消えた。

泣きそうな顔を思い出して、ばーか、とせせら笑つてみる。せせら笑う振りをして、本当はもつと、別のことを期待している。

本当はコロッケパンなんてどうでもいいし、パリリなんて求めてはいない。

隣にいて欲しいのは親友であつて、親友の条件は人間であることではないはずだ。

そうだろ、なあ藤田、お前はそうじゃないの？

俺はそうだよ。

別に人間とか男だとか同級生とか、そんなこと、ぶっちゃけどうでも良くないか？

親友だつて、言ったのはそれは、今まで過ごして積み上げてきた時間と想いがあつてこそだろ。

本当は言い返されたいのだ。

怒らりたい、とさえケンジは思っている。

俺は、お前に叱らりたいよ。

なあ、藤田。

お前は本当に、俺が、お前の秘密を、そんなに軽々しくバラすとも思っているのか？

「買って、来たぞ！ バカ！」

「まあ、どうもサンキュ、オオカミく……………」

「わー、わーわーわー！！！」

柵から身を離して振り返れば、ぜえぜえと肩で息をする藤田が両手を両膝に当てる屈みこんだ姿勢で、ぐったりと怒鳴っていた。

その手首には薄っぺらいビニール袋が引っかかっている。やっぱり腹も空いてるなど空腹を意識したケンジが上機嫌に礼を言えば、慌てた藤田に口を塞がれる。

正直、屋上に人はあまりいないし、いたとしてもかなり離れたところにいるからケンジの言葉が聞えているとも思えなかった。

むしろその後の、誤魔化す為の藤田の大声の方がよっぽど一目をひいたほどだ。

こちらに向けられた疑問の視線がだんだんと何やってんだお前ら、と責めるような鋭さを帯びてきたので、ケンジはや

んわりと藤田の手を払い落とす。

「なんだよ、あの歌ってほんとだったんだな。男はみんなオオカミなのよ」

「言うなよ！ 人前で！」

「言っていないよ」

「言ってるじゃん！ まさに今！」

「言っていない」

少し、強めの口調になつてしまった。

気おされたようにふっと、藤田がいったん黙った。

二人の間に風が吹き抜ける。

雲が動いてその結果、真昼の月がのぞいているかどうかなんて、今のケンジにはどうだったか。

「言っていない、オレは、お前がいなくていいところでは」

信じてくれたらいいのに、とケンジは思っている。

思っているケンジ自身が、その思いを自覚できてはいない。ただもやもやと形のない、苛立ちみたいなもどかしさが腹の底に沈んでいくだけで、どうやって解消したらいいのかも当然理解できない。

だから藤田に伝わる訳もなく、お互いに、持て余している感情の正体が何なのか、わからないままに向かい合った。

お互い自分の感情に困っていて、何かを相手に伝えたいと思っているのに、それが何か、言葉に出来なくて動けない。

「返す、サイフ。後これ、パンだけど……………」

「ん、さんきゅ。お前は？」

「弁当」

それでも腹が減ってはなんとやら、で。

空腹におされるようにのろのろと、とりあえず問題は棚上げにしたまま、二人は並んで昼食にする。

藤田の弁当はだいたいいつも変わらない。半分に米がぎつちりとつまり、半分に恒例のおかずが並ぶ。

ビニール袋からパンを取り出したケンジはその商品名を読むために、しばらくの間固まってしまった。

あー、と気まずげな声となりからかかる。

「な、なんかそれ新しいやつなんだってさ。ほら、コロツケパン売り切れだったし、それも一応コロツケパン……………」

「なんかコロツケパンっていうか、いやにじゃがいもたっぷり重たいカレーパンなんだけど」

「でもほら、コロツケパンって書いてあるし」

「コロツケ、カレーパン、って読めるな」
「……………いいだろ、別に。それで」

文句を言ったってこれしかない以上、手元にあるパンを食べるしかなかった。

空きつ腹にいやに香ばしいコロツケパンは、辛くて何だかしみるようだどケンジは思う。

「ま、いや。あと今日お前んちにゲームしに行くから」

「散らかってっけど」

「いつもじゃん」

それできつと、格ゲーかなんかして、圧勝して藤田をふくれさせるのだ。

とりあえず今はそんなことを考えて、ケンジは口の中の辛さから気を紛らわせた。

「金曜日」

2010/07/30

ろくな食生活を送っていない友人が、今日うちに「ご飯食べにくる？ なんて聞いてくるものだから、その珍しさに思わず承諾してしまっていた。

そのくせ一緒に帰る気はないらしい。まだ講義の残っている彼を置いて、さつさと友人は帰ってしまった。

一度来たことあるからわかるでしょう、と。

わかるけれども、別に待っていてくれたっていいじゃないか。別にいいけど。どうせ、同じところに帰るのだから。

仕方なく彼はひとり、いつもとは逆方向の電車に乗った。

その途中で受信したメールにより、卵と牛乳を調達する。この代金はどうなるんだろうと考えながら、ビニール袋をがさがさ言わせて見覚えのある、馴染みのない町並みを歩いた。

一人暮らしの友人の家へ帰った。

結局一パック十個入りの卵はほぼ壊滅的な状況へ追いやられたので、何となく彼は金を出せと言いついにしにくくなってしまう。

「卵割れてるよ！ 何で投げるんだ！」

「胸に手を当てて考えてみる！」

「……………はっ、胸がない！ つるべただ！」

無言で傍らにあったイスを掴みあげたらしいまっぴん本当に申し訳ありませんと土下座された。混乱はおさまらないものとりあえずイスから手を離した。

友人はおそろおそろ顔を上げて、それから立ち上がってスカート裾をつまみ上げた。

くるくる回って、汚れていないか確かめている。

そもそもその服装が間違っていた。

呼ばれたからってのこのくるんじゃなかった、と彼は思う。

言いようのない頭痛を感じて、額に手を当ててテーブルに腰を打ちつけた。

そのままテーブルに体重を預け、うめくようなため息を落とす。

「……………ん、変態が」

「結構したんだからねー。君がよろこんでくれると思ってさー！」

「誰が、何ですって？」

「それに今日はセーラーさんの日だ。金曜日だぞ？ みんなでカレーが定番メニュー」

「じゃじゃーん、と友人はカウンターの向こう、コンロの方に行つてしまふ。

身を翻したとき、一緒にスカートの裾がはらりと揺れたのを見て彼は絶望的な気分になる。

何だ、その浮かれた格好は。変態か。変態なのか。

世の中本当に、そんな趣味のある人間がいるなんて思わなかった。

いたとしても都市伝説の類であれば彼としては幸せだったが、不幸にも一番親しい友人がその淡い願望をぶち壊しにしてくれる。

なんでこんなやつと友達やっているんだろうと、彼はこっそりわからなくなる。

「見てみて、がんばって、作っています」

「……………作って？」

「作って」

「包丁も、まな板も使った形跡ないんですけど」

「ほらほら、お鍋、使ってるでしょ！」

「……………料理？」

「料理」

鍋の中でぐらぐらと色のない水が沸いている。

傍らには、見覚えのあるレトルトのパッケージ。

彼はふらりとおぼつかない足取りでテーブルまで戻り、深くイスに腰掛けた。

なにやら軽い物音がして、ぺたぺたと素足の足音が駆け寄ってくる。

彼の足下に座り込んだ友人が彼を、まっすぐに見上げていた。

「ほめて？」

まあ、料理。

レトルトでも、料理。

彼は認めたくはなかったが、今までの友人の食生活を考えしてみた。一週間マックのハンバーガーのみというのもざらだった。コンビニのカップラーメンを全種類買い占め、やれこのメーカーはどうだ、この銘柄はどうだ、などといったレポートを連日聞かされたこともあった。

気付かれない程度にさりげなく、くん、と鼻をひくつかせて匂いを嗅ぐ。米の炊きあがる匂いがする。くう、とつられ

て腹が鳴りそうになった。

「進歩、といえは進歩なのか。果たしてほめる価値などあるのだろうか。」

迷いながらも彼の手は、思考とは無関係に動いていた。

床に直接座り込む彼の、頭の上に手をのせてやる。

そのままがしがしと、犬にでもするみたいになでてやればうれしそうに目を細めて笑う。

自分はこいつに甘い、という自覚は一応、ある。

頭の上においた手を取られ、頬にすり寄せられても、その手の平に唇を押し当てられても、特に振り払うこともしなかった。

「ちらり、と様子を伺うように見上げてくる瞳に射ぬかれるような気分になる。」

吐息が当たっている場所に舌が這った。ぴくりと中指が揺れる。

友人の目が愉快そうに、からかうように笑んでいる。

「おなかすいちやったなー」

「じゃあ、早く作ってくださいよ。あたためるだけでしょー」

「私は君が食べたいのだけど」

「着替えてこい」

「いいじゃん、このままで」

女の子に襲われちゃいなよ、とふざけたことをぬかず友人に、卵と火の状態を聞いた。

「だいじよーぶ、ちゃんと、拾っておいたし止めてきたよ」

「どうするんですか、割れたの」

「卵焼きでも作ればいいんじゃない？ オムレツとか」

「そうかい」

片手をとられたまま、もう片方の手を開いて見せて、お好きにどうぞ、と仕草だけで伝えてみた。友人は膝立ちになつてぎゅう、と胴体にしがみついてくる。

友人が顔を横に向けて、耳で腹を押してきた。

ぐいぐいと締め付けられは少し苦しくなる。

「あは、お腹、空いてるんだねー」

切なそうな音がするねと友人は笑う。

笑うくらいならとつとと餌付けてくれればいいのに、と彼は思う。

当然、そんな素直なやさしさを、友人が持ち合わせているとは信じていないが。

「もっとお腹空かせたら、もっともっと美味しくなるよ。ごはん。空腹は最高のスパイスなんだってさ」

「……………そうかい」

抱きついてくる友人の髪を乱して額を出して、身を屈めて口付けた。

回りくどい親切が友人の愛情だというのなら、それを甘んじて受け入れる用意も彼には、ある。

ねえせんせーって呼んでやっていい？ というふざけた発言には額を軽く叩いておいた。

とりあえず今はまだ、変態の道にいつしよに落ちてやる準備は彼にはない。

「ちえー」

ひどく残念そうに唇を尖らして、また、すりすりと友人は彼に抱きついてきた。

「土曜日」

2010/07/31

学部生だったときには休みだった土曜日が卒論配属になってからつぶれるようになった。

といっても強制されているわけではない。妹子の研究室はかなりゆるい方だ。自由。その一言ですべてが片付く。

学生の主体性を重んじていると言えば間違いではないのだが、実際は教授が個人の時間を管理するのも束縛するのも苦手なだけだったりもする。

その教授自身がわりと他の用事に自分の時間をとられることを嫌う。

自分が嫌なことはしない主義なのだ。実に正直で分かりやすく、妹子は教授の芭蕉のことを気に入っていた。

だから土曜日にも研究室に通うようになったのは、義務ではなく自主的にだ。

卒論を進めたいし、一人暮らしの家計を少しでも浮かせるべくエアコンを使わないため家を空にする目的もある。今年

の夏は特に暑いから必要な対策だ。

「なーなー、芋っ子ー。今日お前んちいってもいい？」

声に文献から顔を上げれば斜め向こう、机に立てた本とかの間からこちらを見てくる太子がいた。

妹子はゆっくりと視線を鋭くして、ゆるゆると太子を睨みつける。

少し怯んだ様子の太子はわざとらしい咳払いで他所を見て、きよろきよろして、でもとくに話題を思いつかなかったのか、それとも思いとどまったのか、改めて妹子に向き直った。

二人の間でじりじりとらみ合いが始まる。

「へえ、太子さんって、小野君ちに行つたことあるんですか？」

太子は隠すことなく堂々と話しかけてきたので、当然、その内容は隣に座る鬼男にも伝わっている。

鬼男も一度作業を中断し、興味深そうに二人を見てきた。さてどうしたものか、と妹子は思う。

そもそも太子への断り方を考えていたところだったのでまずどちらを先に解決すべきか考えることになる。

「もちろんだ、妹子と私は仲良しだもんなー！」

「こないだ、終電がないからつごねられたんで一度泊めて

やっただけです」

答えが出る前に即答された。げんなりと、妹子は事実をそのまま伝える。

鬼男はとくに気にした風もなく、へえ、小野君一人暮らしなの？ 家賃とかどれくらい？ とかいろいろを聞いてくる。一人暮らしに興味があるだけなのか、それとも鬼男自身一人暮らしをしているのか、妹子は知らない。

「あの、もしかして鬼男先輩も」

「ちなみに私も一人だ！ 家賃は………」

「あなたのことは聞いてないよ！」

やいのやいのと言いつつうちに、色々なことがほつたらかしくなった。

卒論とか今日来るだの話とか。

「自炊面倒なんだよな。でも外食ばっかだと金ないし」

「ああ、うんわかるよ」

「そうか？ だったらお菓子を食べればいいんじゃないか？」

「どこの時代の貴族ですかあんだ」

おかしいかなあと首をひねる太子を見て、この金持ちめ、と妹子は内心毒づいた。

「お先にー」

「お疲れさまです」

三時になるなり鬼男は帰宅してしまい、研究室には妹子と太子のみが残された。

妹子はつい先ほど知ったばかりだったが、どうやら今日芭蕉は来ていないらしい。いつも教授室にいたので、いても顔を合わせていないだけかと思っていたのだ。

文献のまとめもひと段落つき、相談をして指導がほしいところだったがいないのであれば仕方がない。

それでも外の暑さはまだ続いていて、妹子はやることになくなったもののまだ家には帰りたくなくて何となくだらだらとしている。

「なあ、今日、お前んちいつていい？」

だからだとネットを徘徊していた妹子は、画面の向こう側にこちらを見る太子を見た。

ぐるりと同じところに戻ってきた気分になる。

今度はどんなに睨みつけても、一度も視線は逃げなかった。

真つ直ぐに射抜かれる。

こちらが逃げたくなるくらいに。

「……………べつに、いいですけど」

どうしてこの人は僕に構いたがるのだろう、と妹子は不思議に思う。

懐かれているような気がする。懐かれるような何かをした覚えはない。ただの研究室でのつき合いだけだ。そのはずだ。向こうが年上で先輩で、こちらが年下で後輩で。

それなのにこうしてあけすけに、好意、といつてもいいのだろうか。言葉が難しく、そもそも言葉にすることに抵抗があるのだが、とにかくこんな風にすがるように期待されると、なぜだか無碍にすることができなくなってしまう。

どうしてだろうか。

妹子には相手のことも、自分のことも、わからなくなる。

それでも両手をあげて喜ぶ男の姿を見ていると、まあ、どうでもいいか、と思考を投げ出してしまえる。

喜んでいいならいいじゃないか。

僕自身そこまで、嫌でないなら。

いいじゃないか。

色々と気になるところを置き去りにして、あえて別のことを考えようとする。

「じゃあ買物くらい手伝ってくださいね。今冷蔵庫空っぽなんだから」

「なにもないならお菓子を」

「嫌ですよそんな偏った食事。希望がないなら適当に決めます」

「え、希望していいの？」

「無理でない範囲内なら」

「えっと、じゃあじゃあ、」

カレーライス。

せき込むように、勢い付いて言われたリクエストを頭の中で反芻して、それなら簡単だと妹子は頷く。

太子は両手をあげて、喜んでくれる。

これでいいんじゃないかな、と妹子は深読みをしたがる思考にふたをする。

どんな深読みをしようとしているのか、そこから目を通して食事の時間から、ここをでる時間を逆算した。

「日曜日」

2010/08/01

じやがいが満載されたかごの中から厳選して八百屋の主人に渡す。同じようにしてにんじん、たまねぎ、それから色付き甘ピーマン。

「イヤだ、それは嫌いだ！」

「はいはい、好き嫌いは治しましょうね」

「いやだつて言ってるだろ！」

まとめて会計をお願いして、おまけしてくれるというので甘ピーマンをお願いして八百屋を後にした。

「むき〜〜！！ もういやだ！ そんな意地悪なお前がいやだ！」

「帰っていただいてもかまわないですよ」
「いやだ〜〜」

子供というものはこんな感じなのだろうかと妹子は考える。きちんと健康管理を考えた食事。野菜をいやがる子供。どうにかして食べさせようとする自分。

「僕はオカンか」

閉口して唇を不機嫌にひん曲げる。

地団太を踏んでしまいいは店の前で転がり始めた太子は放つておいて、妹子は肉屋に向かう。

「カレー用のを三百グラム」

放っておかんといて！ と必死の形相で駆け寄ってくる太子を一応待って、肉の方の袋を押しつけてから妹子は歩きだした。

「いいか、それをだめにしてみる、今日のカレーは肉抜きですからね」

「……………そんな殺生な」

冗談のつもりなのか無自覚なのか、わからなかったのです。ツコミは控えておいた。

台所には食欲をそそる香りが充満している。

妹子はエプロンをつけて鍋に向かっている。ぐるぐると時折お玉でかき回し、底が焦げ付かないようにじっくり煮込んでいく。

太子は台所の机に向かいすに座り、だらしなく両手を下げて顎を机にのせていた。

「ま、だー？」

「まだ」

くつくつとルーの煮立つ音がする。

ちらりと振り返ると太子は、眠たげに臉を震わせていた。

「今日は楽しかったな」

「そうですね」

「釣りにも行っただし、山にも行っただし、お花畑も」

「釣れませんでしたけど。迷いましたけど。偶然だし」

「偶然あんなきれいなとこ、見つけられた方がうれしいんだよ」

びっくり箱みたいでさ、と太子は眠たげにもそもそと話す。

妹子はびっくり箱というものがなんなのか、知らないで想

像するしかない。山を転がり落ちてくる玉手箱みたいなものかなと妹子は考えた。中に花が入っていると思ったら煙を吸って老人になってしまう。なるほどそれはびっくりだ。何でびっくり箱を知らず玉手箱を知っているのか、妹子自身は気になっっていない。

「介護はしませんからね」

「やさしくしてよ」

微妙にかみ合わない会話を、二人して続ける。

太子が今日の出来事を、夢見るような口振りでひとつずつ挙げていく。

妹子がそこに相づちを打つ。

「できましたよ」

二人、向かい合ってカレーを食べた。

太子はカレーのよそい方に文句を付けたが、妹子は聞く耳を持たない。

「じゃあこれ食べたらトランプで勝負だ！ 私が勝ったら私

の言うとおりによそうんだ！」

「じゃあ僕が勝ったら冠位を一つ上げてください」

「ものすごいこと要求してきたこの子……………!?!」

やいのやいのと話しながら食べる。トランプ、トランプ！
いいですけど食べ終わったらまず風呂入ってくださいよ。何
で？ ぼろぼろこぼしてるからだよまず洗ってこい！

カレーの中の甘ピーマンが太子のスプーンの上にはのつて
いる。

やいのやいのと騒ぐ合間に口に運ぶ。

こつそりと見守る妹子には気付かず、文句も言わず、太子
は美味しそうにカレーを食べていく。

「ちくしょー、まだ、風呂になんか入ってやらん！ 母さん、
お代わり」

「だれがオカんだ」

突き出されたカレー皿にごはんをよそってルーをかける。

だから、こういうよそい方じゃなくって！ と太子は文句
を言っていた。

だったら自分でやればいいのにと、思ってた言わない妹子も
ついでに、自分のお代わりも用意して席に着く。

二人きり、夕飯時。
日曜日の夜だった。